

二〇一七年十二月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』に掲載された小泉八雲の作品を読みました。

森銑三は『赤い鳥』昭和2年6月号に掲載された「小泉八雲（伝記）」の中で次のように書いています。

皆さんは、ずっと前の「赤い鳥」に出た ①興義（こらぎ）といふ畫の上手な坊さんの話や、②果心居士（くわしんこじ）といふ、ふしぎな老人の話をおぼえておいでよすか。あれらは日本の昔の本に出てゐるお話なのですが、ヘルンが書き直したために一層有名になつてゐるのです。本號に出てゐる ③「壇の浦の鬼火」は、もと／＼ヘルンが「耳なし芳一」と題して描いたお話なのです。（78頁・番号と傍線は筆者）

ここで紹介されている八雲の作品を読んでみようということになりました。掲載年月は次のようになります。

- ①『赤い鳥』大正8年8月号 江口喚「鯉」
- ②『赤い鳥』大正15年3月号

下村千秋『生きた絵』の話

- ③『赤い鳥』昭和2年6月号 下村千秋「壇の浦の鬼火」

小泉八雲の話は①②『日本雑記』（1901年初版）、③『怪談』（1904年初版）に載っています。銑三はたびたびこの

「果心居士」と「耳なし芳一」の話について書いています。

八雲は石川鴻斎の漢文の怪談集『夜窓鬼譚』に拠って「果心居士」の話を書いたのだそうです（『森銑三著作集続編』第13巻「果心居士」205頁）。その元の話はどこから採

つたのかは分からないけれど、もともとは中国の話だったらしいものを、信長の時代の話にして、果心が獄中でぐう寝続けている間に本能寺の変が起こるといふ一段に不気味な面白さがあると、銑三は言っています。

十二月の会でこの話を読んだ時、会員の中に「八雲の話を読んでいたわけではないのに、この話を知っていた」という人がいました。それは司馬遼太郎の短編の「果心居士の幻術」を読んでいたからではないかということになりました。「耳なし芳一」の話にしても、八雲の話として読んだという記憶がないのに、子どもの頃から知っていたという人もいて、八雲の話がいかに浸透していたかが分かります。

ところで八雲の「耳なし芳一」の話について森銑三は、八雲は天明版の『臥遊奇談』に拠ったのであるが、それより先に『御伽物語』に「耳きれ団都（だんいち）」の話として出ていっていると書いています。もしも八雲が『御伽物語』の方を知ったなら「耳きれ団都」の話として書くところだった、と面白そうに言っています（『著作集続編』第11巻「落葉籠」33頁）。書誌学者の森銑三らしい書き方だと思わされます。

森三郎が『赤い鳥』に初めて投稿した「赤穴宗右衛門兄弟」の話も小泉八雲の「約束を守る」を童話にした物であったことは、何回か紹介してきましたが、森三郎も、小泉八雲のものはすでに下村千秋氏によつて、目ぼしいものが描かれてしまっていたと「私の記者時代」（『赤い鳥代表作品集・③後期』316頁）で書いています。そして森銑三が列挙したものの他に「神様の布団」も上げています。森三郎は自分が童話にするのだったらという小泉八雲の話をたくさん読んでいて、その中から「赤穴宗右衛門兄弟」を選んだのだということが窺えます。「神様の布団」は『知られざる日本の面影』（1894年初版）に入っています。『赤い鳥』大正14年4月号に掲載されています。皆で読んだ時、思わず涙をこぼす会員もいるほど、胸に迫る話でした。「赤い鳥」を読んでいた子どもたちと同じ思いで、小泉八雲の作品四作を一気に読み通した楽しい会でした。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日）に刈谷市中央図書館で開催

2月9日（金）午後1時半～3時半

『森三郎童話選集 かささぎ物語』掲載作を順に読んでいきます。